

乳幼児の母子関係と道徳性 発達の基盤

村上雅啓

目次

はじめに	1. 胎教と乳幼児の発達
I. 道徳性の発達に関する3つの理論	2. 母子関係に関する所論の吟味 ——授乳と吸啜行動をめぐって——
II. 母子関係と社会的行動の発達段階	V. 乳幼児早期の母子関係と道徳性発達の基盤
III. 母性愛の形成に関する所論の吟味	1. 母子関係と基本的な愛情の形成
1. R. シャーファーの所論の吟味	2. 母子関係と発達障害
1) 人格の要因	3. 母子関係と乳幼児の効力性の動機 ⁽¹⁾
2) ホルモンの影響	4. 母子関係と言語の発達
3) 子供であることの剝奪	VI. 結論と課題
4) 知識と無知	
2. H. F. ハーローの所論の吟味	
IV. 乳幼児早期の発達と母子関係	

はじめに

人間が道徳性を身につけて、望ましい人間として発達するためには、最少限どの点に留意すればよいのだろうか。

今日、社会問題になっている、登校拒否、家庭内暴力、拒食症、緘黙症等、いわゆる思春期挫折症候群と呼ばれている症状は、一面では道徳性と関係があるように考えられている。いわく、学校でも家庭でも道徳教育を徹底して本人の道徳性を高めれば、そのような症状を呈するはずはないと。ところが精神医学方面からの研究によれば、それらの症状を呈する原因は、道徳以前の問題であることがわかり始めてきた。現在、この思春期挫折症候群の原因は、胎生期（胎教）と乳幼児期の母子関係と相関関係があることが研究上明らかになってきている。また、正常な脳と身体を有しながら、乳幼児が発達障害（言葉遅れも含む）を起こすのは、不十分な母子相互作用にその原因があることが判ってきている。さらに、道徳性の根本とも言える愛情豊かな精神が形成され人間性がより豊かに発達するには、生後18ヵ月頃までの母子相互作用の質に関係があることが実証的に明らかにされている。

上記のような、思春期挫折症候群と言葉遅れ等の発達障害の研究成果からみると、子供達が学校生活や社会生活に適応できない、つまり、社会的行動が未発達とも言える原因等が、いずれも機質的な疾患よりも、むしろ乳幼児期における母子関係とより密接に関係していることがわかってきている。道徳性を有した行動は、もちろん人間の社会的行動の一部である。しかしその社会的行動の発達の基盤が乳幼児期の母子相互作用に依存している点は、道徳性が健全に発達する基盤を考えるうえで重要なことである。

道徳性の発達を考察することは、モラロジー教育を推進していくのに重要な視点である。モラロジー教育の理論的側面を前進させるために、またより実りある家庭教育を進めていくためにも、乳幼児の発達過程とその前提となる母子相互作用に着目することは重要だと思われる。

人間性の発達、特に道徳性がよりよき方向に発達していくためには、乳幼

児期に体験すべき基本的な要件があるように思われる。本稿では、現代の研究成果を紹介しながら、この点について考察していきたい。

I. 道徳性の発達に関する3つの理論

道徳性の発達は社会性の発達の一側面である。“Psychology Today, an Introduction”によれば、現在、道徳性の発達の研究には3つの潮流がある。精神分析理論の立場、社会的学習理論そして、認知発達の理論である。

第一の精神分析理論の立場は、S.フロイトに代表される。この理論の中心は「情動」である。道徳性の感情は、従来考えられてきたように生まれながらに身につけているというよりは、道徳性の感覚を発達させるのだということをも最初に示唆したのはフロイトである。フロイトは「生まれたばかりの乳児は基本的には道徳不在とみなし、子供と両親の相互作用を通して道徳性を発達させると考えた。フロイトは、エディプスコンプレックス(Ödipuskomplex)、または、エレクトラコンプレックス(Elektrokomplex)の解決は道徳性の発達でもっとも重要な事象であると論じた。同一化(Identifizierung)の概念を使い、この同一化こそが道徳的発達の始まりであるとした。

男の子は父親と同一化することによって父親の超自我(Über-Ich)をとり入れる。つまり父親の道徳的基準をとり入れていく。これが道徳性の発達である。女の子は母親の道徳的規準を内面化することによって超自我を獲得していく。

第2は社会的学習理論であり、A.バンデューラーに代表される。この理論は直接的な報酬や罰が与えられない時でさえも道徳的行動が生起する理由を条件づけと模倣に焦点をおいて説明する。理論の焦点は人間の「行動」である。

第3は認知発達の理論である。L.コールバーグによって代表されるが、道徳性の発達はJ.ピアジェの認知発達の一般理論に基づいている。この理論の中心は「思考のプロセス」である。

以上のべた3つの理論の前者2つは道徳性の発達は文化に相対的(文化に

よって違う)との立場、あとの一つは、文化を問わず普遍的であるとの立場をとる。道徳性は文化によって、またその視点の置き方によって同じであったり異なっていたりする。

三つの理論は、共に子供の道徳性の発達に影響を与える重要な社会化の代理人として両親を重視する。

しかし、これらの理論は乳幼児期早期の発達には関心が薄いようである。S. フレイバーグは生後18カ月間に母親(あるいはこれにかわる人)から一貫した母性的愛護を受けなかった乳幼児は自我の形成障害をきたすことに注目した。彼はそれを「愛欠病」と名づけ、乳幼児初期の母子相互作用が人間の発達にとっていかに重要であるかを論証している。

本稿は特に、母親と乳児の相互作用の起点(H. S. サリバン)である授乳と吸啜行動を中心とした母子相互作用に焦点をしばって、道徳性の発達の根幹になる愛情の発達と効力感の発達、さらに言語(ことば)の習得の仕組に論及し、道徳性が発生し発達し続けることと「母子関係の相互作用の質(E. H. エリクソン)」は密接な関係があることを明らかにしたい。

II. 母子関係と社会的行動の発達段階

道徳性は社会性の一部であるが、道徳的行動は社会的行動であり、社会的行動の発達の基盤なくしては道徳的行動も道徳性も考えられない。

R. シャーファーは社会的行動は次の3段階を経て発達するという。第一は人間を環境内の他のものとは別のひとまとまりの類として分化させる段階、第2は、特定の個人を知っているものとして再認する段階、第3は個別の絆を形成する(生後7カ月頃)段階である。最後の段階は、はじめの2つの段階の発達をまたなくてはならない。社会的行動の習得に最も必要なものは母親あるいは、これにかわる人の一貫した母性的行動を基盤にした母子関係である。

新生児が生後18カ月間、十分な母性愛行動を受けない、つまり、母子相互作用が十分でないと自我の形成障害がおり、その後の発達障害をおこす。

フレイバーグはこれを愛欠病と名づけている。

III. 母性愛の形成に関する所論の吟味

人間以外の動物は、動物園など人工の環境でなく野性の自然の中で育つ限り、育児ができないとか、育児を放棄するとか、育児に失敗するとかはありえないのである。

では、なぜ人間だけが育児不能とか育児放棄とか、育児に失敗するとかいう現象が生じるのか。育児行動を支える母性愛は女性に生来そなわっているのか。乳幼児期の初期に深く関わりあう母親の母性愛を考察するゆえである。

1 R. シャーファーの所論の吟味

R. シャーファーによると、母性愛は呼吸のような人間の性質の必然的な部分ではない。母性行動は、環境のいかんに関わらず盲目的・自動的にあらわれる生まれつき決まった行動パターンであるという意味での本能ではないという。R. シャーファーは母性愛を刺激作用や語り合いのような母性行動として把握し、これらに影響を与える条件を5つに分類して考察している。その条件とは、①人格の要因、②環境条件、③ホルモンの影響、④子供であることの剝奪、⑤知識と無知の以上5つである。以下にこのうち4つの条件に関してR. シャーファーの所論を吟味する。

1) 人格の要因：母親の場合、人格の中心的な役割を果すのは感受性である。母親の感受性は本稿において重要な意味をもつ。子育てにおける母親の感受性の重要性を指摘したのはM. エインズワースである。彼女は乳児の行動の変異のいくつかを説明しようとして「感受性—非感受性」(sensitivity-insensitivity)の尺度を使った。「この尺度は、子供からの信号やコミュニケーションに対する母親の反応を扱うものである。エインズワースによれば、感受性の高い母親は、ものごとを自分の乳児の観点から見ることができる。彼女は乳児からの信号を受信するように自分を調整している。彼女はそ

れを正確に解釈し、敏速かつ適切に反応する。乳児が欲しがっているものをほとんどいつも与えているが、そうしないときは、巧みに乳児からのコミュニケーションを認めてやって、許容できる代わりのものを与えてやる。彼女は、乳児からの信号やコミュニケーションに対してただちに自分の反応を随伴させる。

エインズワースによると感受性の高い母親の乳幼児は、「見知らぬ場所を探索することができる安心感をもった乳児である」⁽⁴⁾ことが見出されている。これは本稿で扱う効力感の育成にも関連する。

以上が感受性の高い母親とその乳児の特徴である。これに対して感受性の低い母親の特徴として次のようにいう。「感受性の低い母親は乳児に介入したり相互作用を開始したりするのを、ほとんどもっぱら自分自身の願望や心理的防衛に照らして解釈して、その意味を曲解するか、または、それに全く反応しない傾向がある」⁽⁵⁾つまり、感受性の低い親は自己中心的で、子供より自分自身の願望や欲求の方に自分を調律しており、子供の発達の進歩にとって多分最大の障害である。このような親は、「子供の能力を歪めてみるだろうし、子供に合わない鋳型の中に厳格で権威主義的な仕方の子供を無理にはめ込もうとするだろう。」⁽⁶⁾という。

筆者が直接症例の改善に向かって関与した登校拒否児、家庭内で暴力を振るう子供、そして、拒食症児の母親にはエインズワースが指摘する感受性の低い点が共通してみられた。この点は、F. ライヒマンが圧制的母親の危険な影響として事例をあげて、母性愛について精神分析の臨床例から理論的に検証している点でも明らかである。⁽⁷⁾

ここでは人格の要因として特に、母親がもつ感受性が子育てにどのような意味を持っているのかを記すに止めた。

2)ホルモンの影響：動物の場合、分娩後のホルモンの変化は出産直後の臨界期に生じ、その間母親は新生児と一緒にいなければならないのではないかと⁽⁸⁾言われている。人間の場合、この臨界期を人間の発達に即して適用することはまだ一般化されてはいない。しかし、生後数日間は授乳時間を除いて、

母親と乳児を別々にしておくことには疑問が生じ、出産直後まだへそのをがついたままの新生児を洗わずに母親の腹の上に乗せることもおこなわれている。

M. クラウスと彼の共同研究者たちは、「生後3日間に（母親が新生児に対して）たった15時間だけ余分に接触すれば、それは一年後でも認められるほどの影響を生じさせる」⁽⁹⁾ことを明らかにした。新生児に接する時間を長く与えられた母親の方が育児に専念することが多かったのである。母性愛は、成母期という感受性期において子供が母の胸にすがりついてその乳首を吸啜することによって点火する愛情にほかならない。成母期はエストロゲン、プロジェステロン、プロラクチン、副腎皮質ホルモンその他の多数のホルモンが、シンフォニーの終末部のフォルテシモのように、一齋に吹き荒れる時期である。⁽¹⁰⁾

3)子供であることの剝奪：この条件は一見理解にとまどう。しかし、R. シャーファーは、愛された経験がないと、愛する能力の発達が妨げられるという。多くの社会福祉事業の経験が示唆していることによれば、「(母性行動の)剝奪を受けて育った母親の子供は、同じように剝奪された子供になりやすい」⁽¹¹⁾という。つまり、「母性行動」の発達が未熟であるという。阿部律も「乳幼児期に母性的養護に欠けた子供の場合は、母親となっても、幼児期に受けた生活と同じ感情が自分の子供に対して再現される」⁽¹²⁾とのべ、この時期の安定した母子関係の重要性と、母性愛行動が何らかの形で母から娘へ伝達されるものであることを示唆している。

4)知識と無知：母性行動の障害は母親の無知によるものが原因の一部として存在すると言われる。⁽¹³⁾重要な点は「発達のな問題をもっとも引き起こし易い母性行動の過程のいろいろな側面」は学校などで教えるような取り扱いが⁽¹⁴⁾できにくいことである。その理由はR. シャーファーによれば次のようである。「母親の非常に多くの相互作用の技能は、微細な水準で生じている。また、その技能は、通常、母親が言語化していない意識的に自覚さえもしていないかもしれない信号に反応して、自動的に無計画に発揮される。いろいろな

理由で、この技能に欠陥のある母親に、どのようにして自分の行動を乳児の行動に合わせたらいかを教えることができるかどうかは、まったくわからない。」

授乳行動を調査したN. ニュートンは、日本でも昭和20年頃までに行われていた母乳哺育のように、乳児が求めるのに応じて授乳するやり方を無制限母乳栄養と名付け、技術的、操作的な育児法となりがちな人工栄養（ミルク）を形式的母乳栄養と名づけ、それぞれの特質について記している。

無制限母乳栄養の場合は、カルチャー期待効果（cultural expectation）があり母性行動は習得されやすい。習得される場面を山本は次のように記している。「無制限母乳栄養の行われるような環境では、普通、子供たちは小さい時から、母が弟や妹にあるいは隣人がその子供に授乳する光景を見て育つ。それが意識されない教育の効果を発揮する。」大人になって母親になった場合この少女期の経験が土台となり、さらに一人二人三人と育てるうちに、そのまた母親や姉、近所の人々とのやりとりの中から教えられ、学んで母性行動はより確実に発達し、母性愛が形成されていったのである。形式母乳、核家族化の進行、女子の就業等々文明の度合が進むにつれ、母性行動は習得されにくくなり、久徳が言うように育児が上手でない母親が多くなっているのは悲しむべき現象である。

シャーフターの所論は母親の母性行動を母親の機能として記している。しかし、そのように母親の母性行動を母親の機能として還元しきれぬかどうかは疑問が残る。しかし、母性愛が、環境のいかんにかかわらず盲目的、自動的にあらわれる生まれつき決まった行動パターンでなく、乳幼児との相互作用によって生まれ発達するものであり、しかも母性行動をとる母親自身が乳幼児期に受けたマタernalケアの影響下にあるというように、母性行動は長期にわたって影響するものであることを十分理解すべきであろう。山本によれば、母性愛は「一次的欲求として女性に具わっている本能ではない」という。母親が子供を不憫に思ったり自分の生命の危険を冒しても子供の生命を守ろうとする行動の作動原理は、「一般的な本能とは異った基盤をもつもの

である」。山本は以上のように母性愛は、本能とは違った基盤をもち母子の相互作用によって形成されるものであることを示唆しているのである。

2 H.F.ハーローの所論の吟味

ハーローは、母性愛を養育と慰撫の段階、移行段階、相対的分離の段階と3段階に分けてのべ、母親の母性愛の本質を遠感覚刺激を与えることにおいている。彼は、人間と人間以外の霊長類を比べて「人間の場合には他の種より、ある刺激ごとに遠感覚刺激が重要な役割を果たしているように思われる」とのべている。フロイトは、母子関係に、おとなのパーソナリティを形成するすべての力が内包されていると考え、唯一この時点での不適応が、後のあらゆる情緒的破局の原因となると考えた。母親の重要性が強調されるゆえんである。

ハーローはこの大人のパーソナリティ形成に及ぼす母親の役割の重要性を認めているが、それに加えて、仲間同志の愛着関係に基づく相互関係の重要性をも強調している。ハーローは母性愛は母の愛情系としてとらえ、これに子の愛情系を加え、このお互いの愛情系によって「子供は安心と信頼という基本的な感情を獲得し、そのことによって仲間に対する適応という難問を解決する素地を得る。」という。仲間との遊びが後々の社会的また性的な運命を決定するが、身近に安全港があることを知らなければ、遊び仲間になりうる相手も最初は、恐ろしいものに見えるという。それほど、母と子の愛情系の形成の最初の基盤となる相互作用は重要なのである。

母性愛は母子相互作用を繰り返す中で育まれるものであることを的確に理解することは、乳幼児の発達と道徳性の発達とを考察する場合肝腎な点である。乳幼児の道徳性の発達の基盤は母性愛行動そのものの質（エリクソン）、いいかえれば母親の感受性（エインズワース）に多くの部分が依存しているからである。

Ⅳ. 乳幼児早期の発達と母子関係

1 胎教と乳幼児の発達

最近の研究によれば、母子の相互作用は胎児の段階から形成されていると言えよう。

母親と胎児は、受胎と同時に“絆”を持っていて、妊娠初期のうちからコミュニケーション・システム⁽¹⁾を打ち立てている。

換言すれば、情報交換システム、つまり、絆を深めあうためのコミュニケーションを持っている。それは、生理的コミュニケーション、動作によるコミュニケーション、共感によるコミュニケーションの3つに分けられるとい⁽²⁾う。

一例として、鬱病^{うつ}のようなものも、胎児期のうちから生じるとい⁽³⁾う。「通常、これは胎児が大切なものを失うことにより惹き起こされる。つまり、母親は、不機嫌になったり、他の面白いことに気を取られるなど、様々な理由から胎児に対する愛情や精神的な支えを放棄することがあるが、こうした、“愛情の喪失”が原因となって、胎児は抑鬱状態に駆り立てられる。無感情な新生児とか16歳になっても気が散漫だというのは、この影響の“後遺症”である⁽³⁾」とバーニーはいっている。

安定した母子関係は胎児の行動を発達させる。出生前の数カ月に、胎児の行動が徐々に複雑なものとなり、方向づけがなされていく。その理由は、「どんどん増大しつつある記憶の蓄積が、自我の形成を助け、導き、胎児の行動を引っぱり出し始めるからである⁽⁴⁾」という。また、「母親の抱擁、愛撫、表情、その他の仕草に対して新生児が反応できるのは、出生前から続いていた母親との長い“付き合い”があるからである⁽⁵⁾」。

人間の発達に重要な関りをもつ記憶が胎内では機能していても、出生後の母子関係の質がよくなければ記憶機能が障害を受けるのである。ごく初期の母子関係は授乳と吸啜という乳児の欲求を介在したものである。この関係は

乳という食物を摂取する欲求だけでなく、それに伴う母親が乳児に与える接触慰撫を乳児が求める欲求も含まれている。

この欲求の充足が適切に行われなかった場合には、記憶機能が障害され、ひいては人間の知能という複雑な機能全体が障害されることがわかってきて⁽⁶⁾いる。

既述のとおり、欲求とは吸乳という食物を求める欲求だけでなく、母性行動（刺激作用とか語りかけなど）によってもたらされるものによって満たされる精神的な欲求をも含むものである。つまり、乳児は食物だけでは生きてゆけない。母親の課題は乳児の空腹による欲求を満足させるだけでなく、乳児が安定感を持つのを助け、乳児を愛されるべき人間として理解することである。

2 母子関係に関する所論の吟味

—授乳と吸啜行動をめぐって—

道徳性の発達の根幹である愛情の発達にとって、授乳 (suckling) と吸啜行動 (sucking) はH. S. サリバンの用法に従えば、nipple-in-lip (唇にくわえられる乳首) の関係は重要な役割を果している。この点を特に精神分析理論では強調している。

フロイトは授乳と吸啜の時期を口唇期 (Orale Stufe, oral stage) と呼び、この期間の自我の発達の特徴は、摂食と口唇による快感が中心であり、これを満たされない時には憎悪が発達すると述べ、自我とリビドーの関係について論じている。しかし、フロイトは、女性とくに母親には関心を示さなかった。フロイトの自我理論を実証的に研究したのは、母子関係の研究者の一人であるJ. ボウルビーである。彼は愛着行動 attachment behavior と分離不安 separation anxiety の概念を使って母子関係を組織的に研究した。ボウルビーのいう愛着理論は、「強い情緒的結びつきを特定の相手に対して起こすという人間の傾向の一つの概念化であり、また望まざる別離や喪失によって引き起こされる不安、怒り、憂うつ、情緒的離脱といった情緒的苦悩

や人格障害のさまざまな形態を説明する一つの方法⁽¹⁾」である。

彼は、授乳と吸啜については乳幼児が母親をもとめ、これを意識するのは単に食物の摂取（乳を吸う）のためであるといい、フロイトがいうように摂食とともに快感（性欲）を満たす源泉であるという点を認めていない。しかし、ポウルビィは生後数カ月間には余り関心を払わなかった。彼は「赤ちゃんが母親を認識したというだけで母親に対する親密さを維持しようという行動⁽²⁾があらわれないうちは「親と子の絆」をつくる行動⁽³⁾があるとはいい難い」という。愛着行動は乳児と母親（あるいは代理者）との絶え間無い母子相互作用によって発達してくるものである。

E. H. エリクソンの自我の発達理論も、フロイトの口唇期の発達理論をふまえている。乳児と母親の双方は、口と乳首という焦点的な器官を通してだけでなく、身体全体で温情と相互性をくつろいで示し合い楽しむ。このようにして発達した、相互にくつろぎあう関係こそは、「友好的な他者との初めての出会いにとって、もっとも重要なものである。このように与えられるものを得て、自分がして欲しいと願うことを自分のために誰かにしてもらうことを学ぶうちに、乳児もまた、与える人になるために必要な自我の基礎を発達させる⁽⁴⁾」と口唇と乳首の関係が単に食物摂取の関係のみではないことを示唆している。

彼は乳児の生後一カ年の経験から獲得される自己自身と世界に対する一つの態度を「基本的信頼」(sense of basic trust) と名づけ、これを健康なパーソナリティの第一の構成要素であるとしている。母親が子供に十分に乳房をふくませて乳を与えたら、基本的信頼感が発達し、突然、乳首を乳児から抜くなどすると不信任が生まれるという。またこの口唇期に基本的信頼が確立しておれば、乳児の世界に「善」と「悪」が入ってくる。そして「乳児に基本的信頼感と基本的不信任の源泉を形成し、それらが一生を通じて、基本的な希望と悲運を自己内部から発生させる原因となって存在し続ける⁽⁵⁾」という。この信頼は母性的な関係の質に左右されるという。「ごく初期の幼児期体験から得られる信頼の量は、食物の絶対量とか表明された愛情量とかに左

右される訳ではなく、むしろ母性的な関係の質に左右されるように見える⁽⁷⁾」と述べ、基本的信頼の形成が母性的な関係の質と大きく関りあっていることを示している。母子関係が人間の一生を規定する内容を持つことは、乳幼児の道徳性の発達を考える上で考慮すべき要因であることが理解できよう。

基本的信頼に立って乳児は文化の仕組みを身につけてゆく。したがって文化要素といえる道徳性を発達させ健康なパーソナリティを形成していく。

生後一年間の乳児の行動を研究し、その間の行動の特性を総称してホスピタリズムと名づけたスピッツは、また乳児の8カ月不安 eight-months-anxiety の概念を提示したが、一面ではJ. ポウルビィのいう分離不安 separation anxiety に起因する行動の諸特性を実証的に研究した。「分離不安」とは子どもと親——通常、母親——双方が相互間に親密な身体的近接を保ちたいという激しい欲求を相手にむけることによって、その行動が特徴づけられるような一種の病的な感情状態である。

スピッツは「分離不安が悲痛や悲嘆へと発展する反応の連続性について観察する機会をもたなかった」とポウルビィは批判している⁽⁸⁾。

スピッツはフロイトの自我形成の概念にもとづいて、乳児を誕生直後から一カ年にわたり観察と実験の方法で実証的に研究し、既述のようにホスピタリズムの概念に抽象される諸特質を明らかにした。しかし、8カ月不安の前兆としてみられる、不快情動の発達は微笑現象の発達と平行して、すでに生後3カ月の間に特殊化されていくと指摘している。つまり、子供は、人間仲間から置き去りにされるたびに不愉快になるのである⁽⁹⁾。

しかし、スピッツもポウルビィやエリクソンと同じくS. フロイトの自我心理学の影響下にあり、授乳と吸啜行動の分析視点は、フロイトに基点をおくものであった。パーソナリティの形成に母子関係の影響を強調したサリバンは、乳児は吸啜行動を通じて、授乳中の母親の態度などから文化を習得していくと、吸啜行動が単に乳という食物を得るのみの行動でないことを示した。「ヒトのコドモは成長がすすみ成熟にむかう途中で〈文化への同化過程〉を避けることはできない。……中略……お母さん役をしてくれる人 (the

mothering one) こそ、幼児が〈おのれという漠然とした実体からある程度独立した個人〉として鮮明に知覚する最初のものである。」⁽⁹⁾

これらの研究成果を基底に、胎児や新生児の発達や、行動、母子相互作用などの研究が進み、授乳と吸吮行動が乳児の他の行動とどのような仕組みで発達していくのかが徐々に解明されている。

乳幼児の発達のみでなく母性の発達も解明されつつある。それは、サリバンは対人関係理論 interpersonal theory において授乳と吸吮行動に、人間の自我機制としての満足の欲求と安全の欲求の両面が伴うことを認め、安全の欲求を満たすことが乳児の心身の発達に必要であることを強調したが、このことは母性の発達の重要性を実証的に明らかにしたものとも言えよう。

V. 乳幼児早期の母子関係と道徳性発達の基盤

1 母子関係と基本的な愛情の形成

ハーローは愛情を5つの愛情系として発達する系として説明している。第一は母性愛、第二は子供の愛、つまり母親に対する子供の愛情である。たとえば、子供同志、青年前期の者同志、青年期の者同志などの愛情である。第四は異性愛、第五は父性愛、つまり、家族や社会集団のメンバーに対する成人した男性の愛情である。⁽¹⁾

これらの愛情系は、愛情の発達において、一つの系は次に続く系の準備になり、またこの系が次の系の準備になるというように進行するという。したがって、ある系が正常に発達しなければ、次に続くより複雑な愛情のための適切な基盤がつかれないとハーローは言う。例えば、母の愛情系と子の愛情系とによって、子供は安心と信頼という基本的な感情を獲得し、そのことによって仲間に対する適応という難問を解決するという。この安心と信頼という基本的な感情の獲得については、エリクソンが言う「基本的信頼 sense of basic trust」と名づけるものと相通じる。⁽²⁾

サリバンは授乳中の母親の態度いかにが乳児の不安（基本的不安 basic

anxiety) をひき起し、これが彼の神経症の原因になると言っている。乳児期の母子相互作用が成人後の人間の心にも影響があることをエリクソンもサリバンも指摘していることは、道徳性の発達を考える場合注目すべき点である。

ハーローは、子供の愛情は母親との関係によって育くまれ、母親からの離脱と母親の分離によって仲間への愛情系を育成していく基盤になるという。

つまり、人間が持つ愛情は乳児期初期の母子相互作用によって育まれるということである。道徳性の中核になる愛情が、母子相互作用によって形成されることは、道徳性の発達を考えるうえで重要である。さらに、モロロジー教育から考えた場合、「生後12カ月の子供にみられる人格形成と親子関係の全体的パターンは後年の人格形成と親子関係にとっても類似している⁽³⁾」とのエインズワースとボウルビィの研究結果は大変示唆的である。最近では、早期の母子相互作用の重要性と不適切な母子分離の危険性について論じた育児理論が多くなってきている。⁽⁴⁾

児童精神医学者のフレイバーグも「永続的な愛や献身的な愛などという、(愛の絆をつくる) 人間的な性質は、人間最初の2年間に作られる⁽⁵⁾」ことがわかってきたと言い、ハーロー、エリクソン、サリバンと相通ずる説を出している。

ハーローが指摘した母子相互作用から萌える愛情がさらに仲間との交流によって発達する点は道徳性の発達を考える上で留意してよい点であろう。

2 母子関係と発達障害

人間的絆の形成には生後2年間の母性的保護が重要である。いうまでもなく、道徳が成立する基盤は人間関係である。人間関係は人間が人間に対して関心を示したり、愛着をもったりする「人間的絆の形成」なしには考えられない。

フレイバーグは「母性的愛護が欠けていた子供で、人生最初の1、2年間に1対1の人間的絆が形成されなかった場合には、その後の小児期におい

て、代わりの家族が与えられた場合でさえも、人間的愛着関係をつくる能力に永続的な障害を示す。その障害の程度は、愛護に欠けていた割合にほぼ比例する。⁽¹⁾ という。この子供たちの一番の特徴は人生に対する無関心な態度と人間的なつながりの欠如であるという。

フレイバーグによれば、乳児期の全部または大部分を、母性的愛護の喪失や人間的つながりの断絶、1対1の人間関係の相手が与えられないような環境、または一貫した人間的愛着のない環境で過した場合、乳幼児はその後も、発達障害をおこす。しかも、発達障害を最もひき起こし易いのは2歳未満の時期であるという。彼によれば発達障害が表出するのは主に次の3つの局面⁽²⁾である。

第一は、人間的な愛着関係を形成する能力の面であり、程度の差はあるが、代わりの両親はおろか、誰との間にも愛着ができていくという。ボウルビィによれば、愛着行動は、青年期以上になると、家族以外の人物ばかりでなく、集団や法人に対しても向けられるという⁽³⁾。つまり、学校や大学、労働団体、政治結社なども多くの人にとっては付随的愛着対象となりうるし、またある人にとっては重要な愛着対象ともなりうるという。また、当初、これらの集団への愛着はそのリーダーに向けられることが多いともいう。いづれにしても、人間は社会的存在である以上集団に所属して生存する。それ故、集団の秩序・統一・発展と個人の幸せは関連があり、その推進力となる道徳性の発達は集団の成員に必要である。その集団に愛着関係が保てないと、人間としての存在そのものを問われることになる。

第二は、知的機能の障害である。これは生後18カ月間にあらわれ、その後の追跡テストでも変わらない。概念的思考という面と、言語も習得が遅れ、好ましい環境が与えられても概念的思考は落ち込んだままだし、言語にも遅れた面は残る。最近、学校教育の場では学習障害児として扱われるケースが多くなってきている。また第2子に多くみられるといわれる言葉遅れの子が増えている。これらはいづれも、先天的な、あるいは、出産障害によるような機質障害でなく、正常に産まれていながら、出生直後からの母性的保護の

欠如や不十分さに起因するものが多いという。(本文111ページ参照)

第三は、衝動的抑制障害である。特に攻撃性の面における障害が、この種の子供の追跡研究のすべてに報告されている。衝動抑制障害は、人格の発達の上で道徳性の発達を阻止する要因となる。精神分析の創始者フロイトは愛の欲求と攻撃の欲求の葛藤が人格発達の中心であることを発見した。正常児の場合、「敵意衝動の方向転換の動因は常に愛であり、これは小児の神経症の場合でさえそうである。愛する人を他のすべてに優るかけがえのないものとして大切に思うあまり、子供は次第に自分の攻撃衝動を変え、愛によっても是認されるような表現方法を見つけ出す⁽⁴⁾」という。たとえば、敵意衝動を遊びや想像の方向に向けるのもそうである。衝動的抑制障害は、攻撃の欲求が突出し愛の形成が弱まることを意味している。また、衝動的抑制が障害を持つため、子供が成長すると攻撃性と性衝動が融合して残忍な行為に走る場合もある⁽⁵⁾。道徳性の発達の基盤となるのは、人間を大切に思う愛の心であることはいうまでもない。出生直後からの母性的保護の欠如により、衝動抑制障害が生じ、攻撃性が愛する力を凌駕するというのは道徳性の発達にとって好ましくないと云えよう。

以上3つの局面以外に、母性的愛護の欠如によって、身体の発達そのものがスピードダウンする発育不全 (deprivation dwarfism 母性剝奪小人症) が生じることよく知られている事実である⁽⁶⁾。またある研究によると、出生時低体重児では軽い脳損傷が原因だが、新生児集中治療室 (NICU) に隔離された乳児でも、本当の母親に愛撫してもらったらすくすく育ったうえ、そんな愛撫を受けなかった乳児と4年後の知能指数を比べると平均で15も高かったことが報告されている⁽⁷⁾。

乳幼児の発達と道徳性発達の基盤として母親の接触慰撫がいかに重要であるかが理解できよう。

3 母子関係と乳幼児の効力性の動機

道徳は本人の自発的な行動をも要請する。そのためにはやる気のある人間

に育てることが重要である。やる気のある人間に育てるには乳幼児期の母子関係に関わりがあることが最近の研究で明らかにされてきた。

母親(養育者)が子供を促すような働きかけをすることによって、乳幼児は特定の活動が「信号としての価値」を持つことを学ぶという。乳児が泣くと母親が現われる。乳児がのどをならしてキャッキョッと行って喜ぶとまわりの大人は嬉しそうに反応する。こうして乳児は周囲に影響を与えることができるという一般的な期待を発達させる。つまり、「効力性の動機(effectance motive)⁽¹⁾」を発達させる。母親が乳幼児が送る信号に一貫して適宜反応してやれないと「無力さ(helplessness)」を感じ、母性行動の剝奪を受けた乳児はこうして無感情と「無力感」を発達させていく。

ヤーローたちは、生後5～6カ月の乳児とその母親41組を調査の対象にした研究の結果、応答的な母親の子供の方が、運動的側面や意欲などの側面の発達がすぐれていたことが判明した。そして、とくに自分の望んだ事物を得ようと粘り強く努力する傾向がより発達していた。また、生後36カ月になった時に測定した結果では、知的発達の一般的水準も、前者の子供の方が高かった。⁽²⁾以上の事実から稲垣は「生後半年以内の子供の不快への意志表示にタイムリングよく応答することはのちの発達一般を促す効果がある」と言っている。

また、発達初期に、「自分は環境に影響をもたらすことができる」という経験をもつことは、大人になって失敗場面に出会っても「無力感に陥りにくくなる」⁽⁴⁾とも言っている。

最近の心理学の知見によれば、「人間は本来、環境に自分の活動の影響を及ぼしたい、環境を理解しコントロールしたいという欲求を持ち、絶えず環境と相互交渉をしている存在である。」⁽⁵⁾とされている。そしてこの欲求の充足は人間に快をもたらすという。

J. ワトソンは、生後2カ月の乳児でも環境に自分の影響を及ぼしたい、環境をコントロールしたいという体験を積極的に求めることを明らかにした。

S. ミラーは6カ月児と8カ月児で彼らに対するたった3秒の反応の遅れが

彼らの学習を完全に妨げたり、くずしたりすることがあることをみつけた。⁽⁷⁾乳児を喜ばせるでき事が少し遅れて起るという遅延報酬は、乳児には思いがけないものに見え、自分の活動とは無関係なものに見えるのである。このような報酬はまったく報酬がないのと同じように無力感を生みやすい。⁽⁸⁾

生後まもなく乳児がこのように環境に働きかけることを、母親あるいは母親代理者(the mothering one)が受け止めてやることは乳児の効力感(効力性の動機)を育成する上で有意義である。

以上、述べてきた点から授乳と初期の吸啜行動を中心にして母子の間で繰り返される相互作用が、後の道徳性の発達に大きく影響してくる効力感の育成に関係していることが理解できよう。

4 母子関係と言語の発達

言葉は非本能的で後天的な「文化的」機能であるから、言葉を習得するには何らかの配慮が必要である。⁽¹⁾

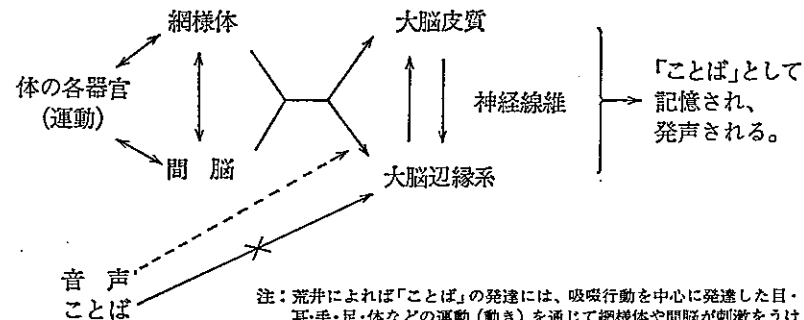
母子関係を組織的に研究したボウルビィは、「乳幼児期に十分な母または母親代理者の愛を受けていない子供は抽象的な思考能力が十分発達せず、自分以外の人や物に愛情や興味を抱くことができない」⁽²⁾という。たとえ、施設でなく、母親あるいは母親がわりの人から育てられても「吸啜行動が制限され感覚器官の反応を刺激するための、十分な母親の愛撫が得られない乳児の場合は、言語の発達が著しく遅れる。」⁽³⁾M. リプルはこのように吸啜行動と乳児の言葉の発達が密接に関連していること、つまり言葉の発達が母子関係に依存していることを指摘している。抽象的な思考内容は言葉によって表現され言葉によって伝達される。言葉は乳幼児が母子関係をより密接にし、そこを基点に家族や仲間とのコミュニケーションを図り、社会的行動を習得し、道徳性を発達させるうえで重要な手段である。

A. ブロドベックとO. アーウィンが乳児の発声と泣き声について詳細に研究した。それによると、「生後6カ月間、孤児院で養育された乳児は、一般家庭の乳児と比べて発声が少なく、生後2カ月ですでにその差は明瞭であっ

た。話し言葉が遅れる現象は、あらゆる年齢層の施設児の特色である⁽⁴⁾ことがわかった。施設では乳幼児が母性的保護に必ずしも十分満足しているとはいいがたい。

荒井は、「子どもの医学協会」の、ある保育園グループで実施した調査では、対象者1600人のうち500人あまりの幼児に何らかの言葉遅れがあったことを記している。乳児が言葉を理解でき言葉を発するようになるには、網様体（重い病気など生命維持の危険を感じる）、間脳（生命の変化・活発な運動や軽い病気などを感じる）、大脳辺縁系（本能的な不満、食事などの不満や感情的な怒りや恐れなどを感じる）等、そして大脳皮質と積み重ねられた四つの装置が系統だてて機能してはじめて乳幼児は言葉を習得していく。ただやみくもに「話しかけ」たり「物の名前を繰り返して言わせたり」しても何の意味もないと荒井は言う⁽⁵⁾。

【図1】「ことば」として記憶される仕組み



注：荒井によれば「ことば」の発達には、吸啜行動を中心に発達した目・耳・手・足・体などの運動(動き)を通じて網様体や間脳が刺激をうける必要があるという。この刺激をへてはじめて大脳皮質や大脳辺縁系に刺激が伝わり「ことば」として記憶され、蓄積される。この刺激が数千回くり返されることによって「ことば」として発声するようになるという。したがって、目・手・足・体を刺激することなく「ことば」として聞かせる。つまり大脳皮質や大脳辺縁系だけを単独に刺激しようとしても、それは刺激をうけたことにならず「ことば」としても記憶されないという。出生直後からのマザーナル・ケアの質と吸啜行動にもなった乳児への語りかけが、乳幼児の「ことば」の習得にいかに重要であるかが理解できよう。

荒井は大脳生理学の立場から以上の点を明らかにした。この点は、デンバーの発達図式（デンバー市で1000人以上の乳幼児の観察の結果をまとめたもの）にみるように（本文120ページ参照）「乳児→幼児」という成長発達段階では習得された行動（運動）の一つ一つがバラバラでなく、お互いに関連しあって発達していることと符号する。特に乳児期には「全身の運動と喃語」、幼児期には「手の運動と言葉」の発達が実に細くお互いに関係している。

荒井は、正常な脳でも親という刺激対象が正当に相手しなければ正当に発達しないと、言っている。「正当な発達のためには、親という刺激の対象が絶対に必要である。『正常』と言わずに正当と言ったのは、脳の発達というものは、仮に『正常』な脳でも親という刺激対象（刺激とは、たたいたり、つねったり、懐中電灯でチカチカ照らすことではない。あくまでも神経学の用語としての刺激）が『正当』に相手をしないと、『正常』な脳も『正当』には発達しない恐れがある⁽⁷⁾。」

必要なのは、乳幼児に個別的に差し向けられ、反応することを求めているような種類の刺激である。J. ケーガンとS. タルキンは、施設児など恵まれない子供たちと、中流階層の子供たちの例を比較して、中流階層の母親は、乳児に個別的に直接、顔を向け合って話す回数はずっと多いということを見出した⁽⁸⁾。つまり、適切な刺激が行われているわけである。

言葉の発達は、授乳と吸啜行動を中心にした母子相互作用の質の程度に大きく左右されるのである。エインズワースが言うように乳幼児に対する感受性の高い母親の方が感受性の低い母親よりも、言葉の発達を促す諸条件が揃っていることは、荒井が説明する脳の機能からも十分理解できよう⁽⁹⁾。

VI. 結論と課題

以上、論及してきた結果成人になっても道徳性が発達し続けるには、特に生後6カ月(T. バーニーは7カ月ともいう)の母子関係が重要であり、遅くとも生後18カ月間における、人間的愛の絆を確立する愛情の発達と自我の形成、さらに何事にも「やる気」をもつ効力感の育成と言葉の習得が必要であ

り、これらの点に乳幼児期における母子関係が大きく関与していることが判明した。道徳性の発達に欠かせない愛情や効力感と言葉は、単独には発達せず、生理・身体的欲求と心理・社会的な欲求に関与しているが、乳幼児にとってそれらの欲求の肝腎な部分は授乳と吸啜行動を伴う感受性の高い母親による母性愛行動を通じてのみ充足されるのである。これらの欲求が充足されることによって五官が発達し、それによって諸々の運動が発達する。これらの発達が総合的に連動してはじめて言葉は習得される。つまり、自我の形成と愛情という人間的絆や効力感と言葉の発達には、母親あるいはそれにかわる人が乳幼児を出生直後から、繰り返し世話をする母性愛行動による一貫した母子相互作用の質（エリクソン）の高さと、感受性の高さ（エインズワース）が必要とされることが多くの研究結果から結論づけられよう。この点から、冒頭に述べた思春期挫折症候群の症例の大半が、母子関係を正すことによって全快する理由が理解できよう。これらの多くは母性的保護の欠如に起因しているからである。

乳幼児の母子関係だけでなくG. ロットマンは母親の無意識でさえ胎児に影響を与えることを明らかにしている⁽¹⁾。エインズワースは既述のとおり母親の感受性を育児行動において重要視しているが、感受性の高い母親と感受性の低い母親自身の生育史上の相違や精神との相関などの研究も今後必要とされよう。

母乳分泌に対する精神的な影響についてはよく知られている⁽²⁾。乳頭吸啜の刺激の情報は、乳首から脳を通るから、母親の精神状態が少しでも悪くなったりすれば、母乳の成分が異ったり、ひどい場合は母乳の分泌は止まってしまう。

今後、乳幼児との相互関係の場における母親の精神作用と育児行動の関係、さらに母親の精神作用と乳幼児の発達との関係などの研究が必要と思われる。道徳性の発達はモラロジーから言えば慈悲心の発達とも関係が深い。慈悲心の萌芽と発達を支える母子相互作用の研究も必要となろう。（昭和59年8月30日記）

注

目次

(1) 効力感とは「効力性の動機」(effectance motive) ともいう。最近の動機づけの心理学でコンピテンス competence 感(有能感) などとともに多用されるようになった。無気力や無力 (helplessness) 感に対する概念である。環境に能動的持続的に働きかける傾向を指して言う言葉。「効力性の動機」として効力感、無力感として用いられている。無力感については、セリックマンが「獲得された無力感」を実験的に研究した功績が認められて1976年にアメリカ心理学会で受賞した。

Seligman, M.E.P., Helplessness: On depression, development, and death. Freeman, 1975 波多野諄余夫・稲垣佳世子著『無気力の心理学——やりがいの条件——』中央公論社 東京 昭和56年 3頁以下

はじめに

(1) 稲村博が、その著書『思春期挫折症候群——現代の国民病』(新曜社、昭58)で始めて使用した用語である。稲村はこの「症候群」を新しいタイプの「病」といい、新規の「疾病概念」として提唱しているが、まだ精神病理学の面では学会として認められてはいない。この概念を明確化することは司法精神医学では避けることができないといわれている。(『季刊精神療法』第9巻第3号、昭和58年7月、福島章の書評より)しかし、本稿では、思春期挫折症候群として一括できる共通した病因のうち乳幼児期からの母子関係の歪が大きく介在している点、稲村と全く説を同じくするので、ここで新しい疾病概念として使用した。

I 道徳性の発達に関する3つの理論

(1) C. Brown et al "Psychology Today; An Introduction" Third edi, Random House, 1975, 南博監訳、藤永保訳『図説・現代の心理学2 人間性の発達』講談社 東京、1983, p.150以下

(2) 同上書 p.197

(3) 「私がここで“愛欠病”と呼ぶ一群の障害は、厳密に言えば、自我の病気であり、自我の発達における形成期に当たる人生最初の18カ月の間に起った、構造的な弱さないし形成異常である。これは神経症にははまらない。」とフレイバーグは愛欠病を定義している。

S. Fraiberg, "Every child's birthright in defense of mothering" Basic Books

Inc., New York 田口恒夫訳『赤ちゃんの愛欠病』日本放送出版協会、東京 昭和55年 p.77

(4) IV-2(7)参照

I 母子関係と社会的行動の発達段階

(1) R. Schaffer, "Mothering," in 'The developing child' ed. J. Bruner, M. Cole, and B. Lloyd, Harvard Uni. Press 1977. 矢野喜夫、矢野のり子共訳『母性のはたらき——子どもにとって母親とは——』、鹿島廣人、岡本夏木、柏木恵子 古崎愛子監訳『育ちゆく子ども 2—0才からの心と行動の世界——』、サイエンス社、東京、昭和55年、p.141以下

cf. T. Verny, 'The secret life of the unborn child,' 1971 小林登訳『胎児は見ている』祥伝社、東京、昭和57年、p.187

(2) 上記Iの注(3)参照

II 母性愛の形成に関する所論の吟味

(1) この点は、久徳重盛がとくに強調している。特に『お母さんがこわい——そして家庭は崩壊する』光文社、東京、昭和58年、久徳重盛『母原病は治せる』第三文明社、昭和58年、東京、等、

(2) R. Schaffer, 上掲訳書 p.133

(3) 同上書 p.129

(4) 同上書 p.117

(5) M. D. Ainsworth, S. M. Bell and D. J. Stayton, "Individual differences in strange-situation behaviour of one-year-olds", in H. R. Schaffer (ed.), The Origins of Human Social Relations. R. Schaffer 上掲訳書 p.117による。

(6) R. Schaffer, 上掲訳書 p.124

(7) D.M. Bullard ed. "Psychoanalysis and Psychotherapy, Selected Paper's of Frieda Fromm-Reichmann" The University of Chicago Press, 1959 早坂泰次郎訳『人間関係の病理学』誠信書房、東京、昭和44年

(8) 羊や山羊のようなある種の動物の場合、出産直後の2、3時間の間に母親が新しく生まれた子供から引き離されると母性行動に重大な歪が生じる。

R. Schaffer 上掲訳書 p.125

また、T.バーナーはねずみの場合の臨界期の実験を紹介している。この点は

筆者が昭和57年度研究部ゼミ(御殿場センター会場)で紹介した。拙稿「文化伝達欠如の諸問題と家族・社会病理」『研究ノート142号』モロロジー研究所研究部編、1983、p.147以下

(9) M. H. Klaus, R. Jerauld, N. C. Kreger, W. McAlpine, M. Steffa and J. H. Kennel, "Maternal attachment: importance of the first post-partum days," New England Journal of Medicine, 1972, 286, 460—3. J. H. Kennel, R. Jerauld, H. Wolfe, D. Chester, N. C. Kreger, W. McAlpine, M. Steffa and M. H. Klaus, 'Maternal behaviour one year after early and extended post-partum contact,' Developmental Medicine and Child Neurology, 1974, 16, 172—9 M.クラウスと彼の共同研究者たちは一連のこれらの報告の中で「赤ん坊と決められたとおりの接触しか許されない母親のグループと、病院での三日間、毎日5時間づつ余分に裸の赤ん坊を母親の寝床に入れることが許されて、普通より延長した接触を与えられるもう一つの母親のグループとを比較した」のである。一カ月後と一年後に再び面接と観察を行ってみると、二つのグループはいくつかの違いを示した。延長接触グループの母親の方が、赤ん坊を他の人に任せるのをいやがり、赤ん坊が泣くことに責任を感じ授乳の間、目と目の接触をしていることが多く、つまり、一般的に赤ん坊に専念していることが幾分多かったという。R. Schaffer, 上掲訳書 p.126

(10) 山本高治郎『母乳』岩波書店 東京、1983、p.81

(11) R. Schaffer, 上掲訳書 p.129

(12) 阿部律「施設収容児の結婚後における家族関係について」、『小児の精神と神経』vol.14, No.2, 1972. 平井信義編著『母性愛の研究』同文書院 昭和56年、p.67この他にも、シュヴィングは、母性的な母親の体験を子供に与えることができない母親は、その母親自身もまた、乳幼児期に母性的な母親の体験をせずに過していることを指摘している。G.Schwing, "Ein Weg zur Seele des Geisteskranken," 小川信男他訳『精神病者の魂への道』みすず書房、東京、1982 p.p. 42~44

(13) イギリス厚生省の報告によれば、「多くの親は自分たちの子供とどうやって遊んだり、話したり、読んだり、一般的にいえば通じあったらよいかわからないし、すべての子供が通過する精神的、情動的、身体的、社会的な発達のいろいろな段階をどのように解釈したらよいかわからないでいる。」という。R. Schaffer, 上掲訳書 p.129

- (14) 同上書 p.130
 (15) 同上書 p.131
 (16) 山本高治郎、上掲書 p.p.59~66
 (17) 久徳重盛 上掲書他
 文明が進む一方で、育児がうまくない母親が増え、それが起因となる母子相互作用の不十分さからくる身体症状(ぜんそく他)を呈する子が増えていることを指摘している。cf. S. Fraiberg, 上掲訳書、p.p.48~52
 (18) R. Schaffer, 上掲訳書「訳者あとがき」(162頁)で批判している点でもある。
 (19) 山本高治郎 上掲書 p.80
 (20) 同上書 p.77
 (21) H. F. Harlow, "Learning to love," Albion Publishing Company, 1971, 浜田寿美男訳『愛のなりたち』ミネルヴァ書房、京都、1981、p.60
 cf. 小林登は乳児の目の刺激を次のように記している。「母子相互作用の一つに視角を通じてなされるものがある。顔は人間の生存に関する多くの情報を伝えるが、特に目(瞳)からの情報は独特である。新生児は、出生直後は近視に準じる程度の視力を持っているが急速に視力を発達させていく。
 母親に関心を示し、見つめるようになる。これはアイ・ツウ・アイ・コンタクト(対眼接触、eye-to-eye contact)と呼ばれる。乳児期には母親の顔を見る時間が全体の20%以上を占め、しかも目をみつめる(サッカデ saccades)時間はその90%に近い。eye-to-eye contact による情報は乳児の発達にとって極めて重要である。」小林登「発育理論と育児」作田勉・松尾宣武編『新しい育児』星和書房、東京、昭和58年 p.15
 (22) 同上書 p.6
 (23) 同上書 p.3
 IV, 1 胎教と乳幼児の発達
 (1) T. Verny, 上掲訳書 p.p. 67~69.
 (2) 同上書 p.75 以下
 (3) 同上書 p.62
 (4) 同上書 p.64
 (5) 同上書 p.69

- (6) S. Fraiberg, 上掲訳書 p.p.89—90
 IV, 2 母子関係に関する所論の吟味
 (1) J. Bowlby, "The making and breaking of affectional bonds," Tavistock Publications Limited, 1979, 作田勉監訳『ボウルビー、母子関係入門』星和書店 東京 1981, p.179以下
 (2) J. Bowlby, "Attachment and loss," Vol.I The Hogarth Press, 1969, 黒田実郎、大羽泰、岡田洋子訳『母子関係の理論① 愛着行動』岩崎学術出版社、東京、1980、p.253, p.369,
 (3) T. B. Brazelton, M. D., "On Becoming a Family, the growth of attachment," Delacorte Press, New York, 1981 小林登訳『親と子のきずな——アタッチメントを育てるとは——』医歯薬出版、昭和57年、序文14頁。
 (4) E. H. Erikson, "Childhood and Society, second edition" W. W. Norton & Company, Inc. 1963 仁科弥生訳『幼児期と社会I』みすず書房、東京、1981、p. 90,
 (5) E. H. Erikson, 1963 上掲訳書、p.90
 (6) 同上書 p.p.93~95
 (7) E. H. Erikson, Psychological issues: Identity and the life cycle 岩瀬庸理訳『主体性・アイデンティティ、青年と危機』北望社、東京、1969、p. 120, 小此木啓吾・小川捷之訳『自我同一性』誠信書房、東京、昭和48年、『現代のエスプリ、母親——母性の氾濫と喪失——』No. 115, 至文堂、東京、昭和52年、p. 125 cf. J. Bowlby, ibid. 1969, 上掲訳書 p.371,
 (8) J. Bowlby, 1969 ibid. Vol. 2. 黒田実郎、岡田洋子、吉田恒子訳『母子関係理論②分離不安』岩崎学術出版社、東京 1981 p.430以下
 (9) R. A. Spitz, Die Entstehung der ersten Objectbeziehungen, Direkte Beobachtungen an Säuglinge während des ersten Lebensjahres.1962, Tr. "The First Year of Life," New York: International Uni. Pre. 古賀行義訳『母子関係のなりたち——生後1年間における乳児の直接観察』同文書院、東京、昭和40年 p.55
 (10) H.S. Sullivan, "Conceptions of modern Psychiatry, a new edition of the first William Alanson White Memorial Lectures, 中井久夫、山口隆訳『現代精神医学の概念』みすず書房、東京、1976 p.p.46—47
 V, 1 母子関係と基本的な愛情の形成

- (1) H.F. Harlow, 上掲訳書 1971, p.p. 58—59 上記Ⅱ注②参照 cf. S. Fraiberg, 上掲訳書 p.p.56—58
- (2) E.H. Erikson, 上掲訳書 1963 p.93, p.95, p.317
- (3) J. Bowlby, 上掲訳書 1979, p.162
- (4) 猪股丈二「各国の育児の違いの現状——比較文化的に——」, 作田勉・松尾宣武編, 上掲書, p.73
- (5) S. Fraiberg, 上掲訳書 p.16
- V. 2 母子関係と発達障害
- (1) S. Fraiberg, 上掲訳書 p.85
- (2) 同上書 p.p. 86—87
- (3) J. Bowlby, 1969, 上掲訳書 p.250
- 「愛着行動とは自分とは別の好ましい一般により強く賢いと考えられる個体に接近し、その関係を維持する種々の行動を指すと考えられる。初期幼児期において特に顕著であるとは言え、愛着行動は、それこそ揺籠から墓場までの人間存在を特徴づける(中略)……ある人間の示す愛着行動の特徴的なパターンは、一部はその人間の現在の年齢、性別、状況などによって、また一部は、幼少期に愛着した人物との関わりの経験によって決定される」J. Bowlby, 1979, 上掲訳書 p.183
- (4) S. Fraiberg, 上掲訳書 p.p.76—77
- (5) 同上書 p.80
- (6) 小林登「発育理論と育児」作田勉、松尾武宣編、上掲書、p. 8
- (7) T. Verny, 上掲訳書 p.p.153—154.
- V. 3 母子関係と乳幼児の効力性の動機
- (1) R. Schaffer, 上掲訳書 p.80
- (2) 波多野誼余夫、稲垣佳世子、上掲書、p.25
- (3) 同上書 p.25
- (4) 同上書 p.25
- (5) 同上書 p.30 ロバート・ホワイトが言った言葉で原著は、White, R.W. Motivation reconsidered: The concept of competence, Psychological Review. 1959, 66, 297—333
- (6) Cf. J. Dunn, 'Distress and comfort'; in "The Developing child" ed. by J. Bruner.

M. Cole and B. Lloyd Harvard Uni. Press. 1977 J. ダン、古沢瀬雄訳『赤ちゃんときげん——表情・身振りの語りかけるものは——』サイエンス社、東京、昭和55年 p.67、ここでJ. ダンは乳幼児が支配感を発達させることを指摘している。

(7) 上掲訳書 p. 82

(8) 同上書 p. 83

V. 4 母子関係と言語の発達

(1) E. Sapir, "Language, An Introduction to the Study of Speech," New York 1921 泉井久之助訳『言語』紀伊国屋書店 1696, 東京、p. 2

(2) J. Bowlby, 'Child Care and the Growth of Love,' Pelican Books, 1953, p.60

『神谷美恵子著作集3、こころの旅』みすず書房、東京、1982、p.75 より引用

(3) M.A. Ribble, "The Rights of Infants early Psychological Needs and their Satisfaction." Columbia Uni. Press, New York. 1943

津守真・野田雅子共訳『乳児の精神衛生』法政大学出版局、東京、1968、p.56

(4) J. Bowlby, "Maternal Care and Mental Health," World Health Organization, 1951, 黒田実郎訳『乳幼児の精神衛生』岩崎学術出版社、東京、1982 p. 7

(5) 荒井良『脳と言葉』社会思想社、東京、1982、p.96

(6) 同上書 p.154

(7) 同上書 p.165

(8) J. Kagan and S. R. Tulkin, 'Social class differences in child rearing during the first year,' in H. R. Schaffer (ed.), "The Origins of Human Social Relations," London: Academic Press, 1971 R. Schaffer, 上掲訳書 p.84

(9) エインズワースの「感受性——非感受性 (sensitivity-insensitivity)」の尺度については、R. Schaffer, 上掲訳書、p.116 原著は、M.D.S. Ainsworth, S.M. Bell and D.J. Stayton, 'Individual differences in strange-situation behaviour of one-year-olds,' in H. R. Schaffer(ed.), The Origins of Human Social Relations

VI 結論と課題

(1) T. Verny, 上掲訳書、p.38以下

(2) 小林登「新生児の能力と母と子の絆」河合準雄・小林登・中根千枝編『親と子の絆——学際的アプローチ』創元社、昭和59年、東京、p.132

Mother-Infant Interaction and the Basis of the Infant's Moral Development

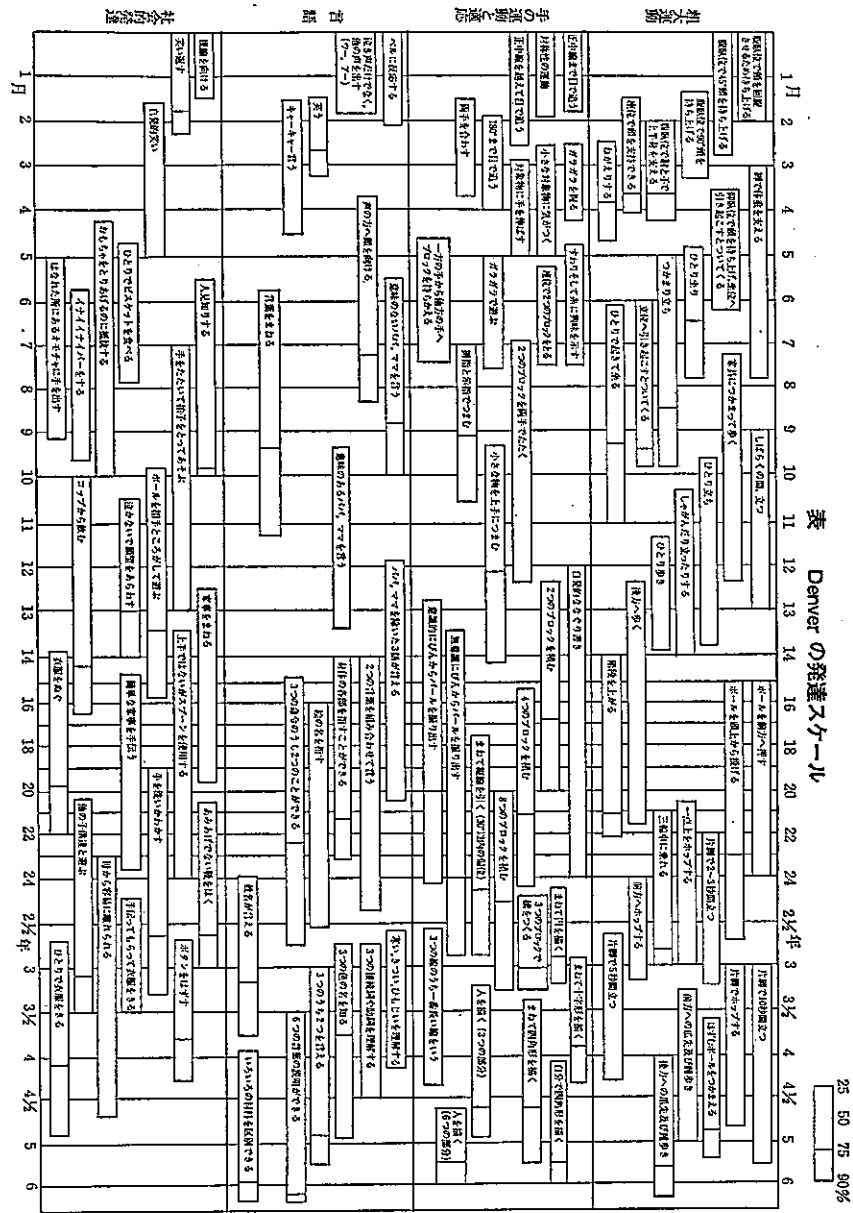
Masahiro Murakami

The three commonly-known theories of moral development are Freud's psychoanalytic theory, Albert Bandura's social learning theory, and the cognitive-developmental theory of Lawrence Kohlberg. Although much can be learned from these theories, they do not directly deal with the moral development of a child until eighteen months after birth.

H. S. Sullivan evolved a theory which he called the interpersonal theory of psychiatry. In this theory he points out infancy as the first of seven stages of development. According to Sullivan, the approximate age of infancy is from birth to eighteen months—i.e., from birth to articulate speech.

Sullivan points out the following four things as pertinent interpersonal experiences in infancy: (1) nursing breast or bottle, great stress on nipple orientation; (2) fearing the good-bad mother; (3) occasional success at satisfying self independently of mother; and (4) completely dependent on paternal-maternal care (from L. J. Bischof, 1964). He emphasizes that mother-infant interaction is very important to the continuing development of social and moral behavior.

In this paper the author stresses four points as forming the basis for moral development: the development of maternal love; infant-mother attachment; effective motive; and speech activities. All of these develop fundamentally through mother-infant interaction. Mary Ainsworth especially stresses the mother's sensitivity in the course of maternal care as being important.



The author addresses these points with reference to the theories of J. Bowlby, E. H. Erikson, S. Fraiberg, R. Schaffer, M. Ainsworth, and others. The conclusion reached is that the quality of mother-infant interaction plays a vital role for the moral development of an infant child.